時流を読む

多様化が進行する稲作

農的社会デザイン研究所 代表　蔦谷 栄一

関心が高まる節水型乾田直播

このところ節水型乾田直播に関する報道が増えている。これは水田に湛水せず、水を供給するというよりは散布にとどめて稲作を行う栽培方法である。この9月25日には「『農山漁村』経済・生活環境創生プラットフォーム」を農水省が主催し、「節水型乾田直播」をテーマとする「第1回田植え不要の米づくり推進コンソーシアム」を開いた。第一部では農業者、技術実証者による事例発表が行われ、第二部では第一部を踏まえてのパネルディスカッションが行われた。会場の農水省7階講堂は、ほぼ満杯で、関心の高さが窺われた。

担い手不足解消・大規模化が目的

水稲の直播栽培には、湛水状態で播種する湛水直播と、畑状態で播種し一定期間後に水を張る乾田直播があり、これらについての技術は既に確立しているとされる。これに畑状態で播種し、水を張らずに、水の散布のみで栽培する節水型乾田直播を、新技術としてその確立を急いでいるものである。

このような水稲の直播栽培に注力する理由は、通常の移植栽培では3月から4月の育苗と移植に必要労働力が集中し、5月以降とは大きな差ができることから、このピークを引き下げることによって労働力の平準化をはかろうとするものである。労働力を平準化することができれば、担い手不足が緩和されるとともに、規模拡大も可能になる、とされる。

水稲の直播栽培面積の推移をみると、１９９５年産は７５０５ヘクタールで、乾田直播が湛水直播の面積を上回っていた。その後、全体では増加傾向をたどったものの、２０１６年産までは湛水直播が主で増加し、それ以降は湛水直播は減少に転じて、乾田直播の増加が全体をリードするかたちで推移した。23年産の直播栽培面積は3万8638ヘクタールで、全水稲作付面積の約2・9％となっている。

あらたに節水型乾田直播の技術確立をはかることによって、直播栽培の拡大を目指す。

農薬・肥料の増大や環境負荷

これに対して農業者、技術者、環境団体等から評価・意見等が出され、また別途の報道等も合わせると、節水型乾田直播は①生産量が不安定、②メタンガス発生を抑制する一方、一酸化二窒素の発生を増加させ、温室効果ガス発生の抑制にはならない、③細やかな水管理が必要で、単純に省力化できるとは言い難い、④雑草管理が難しくなる、⑤生物多様性に影響する、⑥連作障害の可能性があり、移植とのローテーションが必要、との見方、意見が出されている。

基本は水田稲作が土台

節水型乾田直播への注目度は高いが、クリアすべき課題は多く、技術確立にはまだ時間を要する。

担い手不足や大規模化に対処して、栽培技術の向上、多様化を促進していくことは必要である。一方で、日本の地形・気候風土に対応して確立してきた移植栽培による水田稲作という土台を大事に守っていくことも欠かせない。